

秩序としての混沌

インド研究ノート

第12回

「近代化」のなかのジェンダー (三)

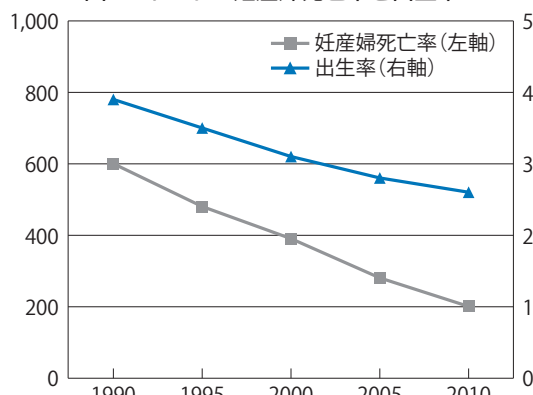
湊 一樹

●女性差別とそれ以外の要因

インドや中国をはじめとする一部の途上国では、人口全体に占める女性の割合が極端に少なく、性に顕著な偏りがみられる（前回の連載の表1を参照）。この事実には、「喪われた女性たち」(missing women) という言葉とともに広く知られており、女性に対する深刻な差別がこれらの国々の社会に根強く残っていることを示す証拠のひとつとしてよく取り上げられる。

しかし、人口全体の性比が大きく歪んでいるからといって、そのすべてが女性に対する差別によって生み出されているという訳ではない。例えば、大多数の人たちが十分な医療サービスを受けられない状況にある多くの途上国では、妊産婦が妊娠中や出産前後に死亡する可能性はきわめて高く、これが女性の死亡率を押し上げるとともに人口の男女比にも少なからず影響を与えている。さらに、一般的に途上国の女性は妊娠・出産する機会がより多いため、このような傾向に一層拍車がかかるのである。図1は、インドの妊産婦死亡率 (maternal mortality ratio) と出生率 (total fertility rate) の推移を示したものである。これら

図1 インドの妊産婦死亡率と出生率



(出所) 妊産婦死亡率は参考文献①、出生率は世界銀行のデータ (<http://data.worldbank.org/>) を基に筆者作成。

(注) 妊産婦死亡率とは、出産10万件あたりの妊産婦死亡数(妊娠中および出産後42日以内の死亡)のことである。より詳細については、参考文献①を参照。

の指標の値は過去二〇年間で急速に低下しているものの、依然として高い水準にあることがわかる(ちなみに、二〇一〇年の日本の妊産婦死亡率は五、出生率は一・四である)。

また、性比の問題を考える際には、人口移動が果たす役割についても十分注意を払わなければならない。例えば、インドの場合、貧しい農村部からより豊かな都市部や工業地帯への労働移動(特に、働き盛りの男性が自分以外の家族を残していく出稼ぎ)が広くみられるため、それが国内の各地域や各州の性比に影響を及ぼしていると考えられる。

このように、性比の偏りの背後には女性に対する差別とそれ以外の要因が潜んでいるものの、それぞれがどの程度の役割を果たしているのかを正確に求めるのは容易なことではない。実際、女性差別によって生み出されている「喪われた女性たち」の人数を試算した研究では、具体的な数字に大きな隔たりがある(参考文献②、一〇五〜六ページ)。

しかし、その一方で、インドでみられる性比の歪みの根底には、女性に対する深刻な差別があるという点に疑いを差し挟む余地はない。なぜなら、〇〜六歳の子供の性比が異常に低い水準にある上に、過去五〇年間にわたってその値が下がり続けているという事実が、このことを強く裏付けているからである(子供の性比については、前回の連載の図3を参照)。

このように考えられるのには、いくつかの理由がある。まず、妊娠・出産にともなう女性特有のリスクや労働移動などの要因は、ある一定の年齢以上の人口の性比にのみ影響を与え、子供の性比とは



バス停の背後に掲げられている、女兒の中絶を止めるよう呼びかける州政府の広告（2013年2月、デリー市内で筆者撮影）

データを用いたその後の研究によって、B型肝炎の罹患率の高さが子供の性比の偏りの原因であるとする議論は完全に否定されている（参考文献④）。また、性比が低い水準にあるのは、センサスにおいて女性が数え落とされているためであるという議論がこれまでもたびたび提起されてきた。しかし、女兒だけをこれほどの規模で数え落としたり、さらにはセンサスのたびごとに女兒の数え落としが増えたりするとは考えにくい（その他にも、参考文献⑤・⑥のような議論がある）。

●「喪われた少女たち」をめぐる問題

男児に比べて女兒の数が圧倒的に少ないのは、女性に対する差別が社会に深く根ざしているためであるという点については多くの研究者の間で見解が一致している。より具体的には、（十分な栄養が与えられないとか、病気になっていも積極的に治療が施されないという意味での）ネグレクトや嬰兒殺しによる女兒の死亡率の上昇、超音波診断などの性選択的技術を用いた中絶による女兒の出生率の低下という二つの要因によって、子供の性比が歪められていると繰り返

返し指摘されている。特に、性選択的技術へのアクセスが容易になってきたことが、子供の性比が低下し続けている最大の理由なのではないかとの見方が強い（写真を参照）。

このような背景から、インドにおける性比をめぐる問題は、人口全体の男女比から子供の男女比つまり、「喪われた女性たち」から「喪われた少女たち」へとその焦点を大きく転換してきているのである（参考文献⑦）。

（みなと かずき／アジア経済研究所 在デリー海外派遣員）

《参考文献》

- ①World Health Organization 2012. *Trends in Maternal Mortality: 1990 to 2010*. (http://www.unfpa.org/webdav/site/global/shared/documents/publications/2012/Trends_in_maternal_mortality_A4-1.pdf).
- ②Sen, Amartya 1999. *Development as Freedom*, New York: Anchor Books.
- ③Oster, Emily 2005. "Hepatitis B and the Case of the Missing Women," *Journal of Political Economy*, 113(6), pp. 1163-216.
- ④Lin, Ming-Jen, and Ming-Ching Luoh 2008. "Can Hepatitis B Mothers Account for the Number of Missing Women? Evidence from Three Million Newborns in Taiwan," *American Economic Review*, 98(5), pp. 2259-73.
- ⑤Perwez, Shahid, Roger Jeffery, and Patricia Jeffery 2012. "Declining Child Sex Ratio and Sex-Selection in India: A Demographic Epiphany?" *Economic and Political Weekly*, August, 18.
- ⑥Drèze, Jean 2012. "Child Sex Ratio and Sex Selection: Old Fallacies in New Bottles," *Economic and Political Weekly*, September 22.
- ⑦村山真弓 [二〇〇九] 「インセンにおける性比問題：文献レビュー」平島成望・小田尚也編「包括的成長へのアプローチ：インセンの挑戦」アジア経済研究所 (http://www.ide.go.jp/Japanese/Publish/Download/Report/pdf/2008_0106_ch7.pdf).